

平成 22 年 4 月 7 日現在

研究種目：基盤研究（B）
 研究期間：2006～2009
 課題番号：18401036
 研究課題名（和文）チベットの文化復興とアイデンティティの形成に関する文化人類学的研究
 研究課題名（英文）Cultural Anthropological Study on Tibetan Cultural Revitalization and Identity
 研究代表者
 煎本 孝（IRIMOTO TAKASHI）
 北海道大学・大学院文学研究科・教授
 研究者番号：50124227

研究成果の概要（和文）：チベットでは、文化大革命（1966－1976）を経て改革開放政策という政策転換のもとに伝統文化や僧院の復興が進み、チベット人としてのアイデンティティが再び形成されるようになってきている。本研究は、チベットにおける文化復興の実態を広域的実地調査により明らかにすると同時に、集中的実地調査をもとに、僧院・祭りの復興、観光化、多民族間関係の分析に基づき、文化復興とアイデンティティ形成のメカニズムを文化人類学視点から解明したものである。

研究成果の概要（英文）：China's shift to economic reform and an open-door policy following the Cultural Revolution (1966－1976) prompted a revival of traditional culture and monasteries in Tibet, leading to a reformation of the Tibetan identity. This study aimed firstly to shed light on the conditions of the cultural revival in Tibet based on extensive field research over wide areas, and secondly to elucidate the mechanism behind cultural revival and identity formation from the viewpoint of cultural anthropology based on intensive field research regarding the revival of monasteries and festivals, the development of tourism, and the multi-ethnic relationships found among different communities.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	2,100,000	630,000	2,730,000
2007年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2008年度	2,500,000	750,000	3,250,000
2009年度	1,400,000	420,000	1,820,000
年度			
総計	7,800,000	2,340,000	10,140,000

研究分野：人文学A

科研費の分科・細目：文化人類学・文化人類学・民俗学

キーワード：文化人類学、民族学、文化復興、チベット、アイデンティティ

1. 研究開始当初の背景

(1)チベットは行政的にはチベット自治区、青海省、四川省、雲南省、甘肅省の各地域に

分けられるが、伝統的にはラサを中心とするウ・ツァン(チベット自治区の中央部と西部)、アムド(青海省を中心とし、甘肅省・四川省

の一部を含む)、カム(四川省、チベット自治区東部を中心とし、青海省・雲南省の一部を含む)などの地方に大別され、「チベット人」意識よりもそれぞれの出身地方意識が強いともいわれる。チベットでは、1966-76年の文化大革命を経て、1978年以降の改革開放政策という政策転換のもとに伝統文化や僧院の復興が進み、チベット人としてのアイデンティティが再び形成されるようになっていく。

(2)チベット難民についてはジャーナリズムで政治問題として大きく取り上げられ、また、宗教学的視点からのチベット研究の蓄積は膨大にある。しかし、チベットの文化人類学的研究に関しては、改革開放路線が実施される以前にチベット地域に外国人が足を踏み入れることは非常に難しかったため、十分な蓄積はなく、また現代チベット社会における僧院の復興やアイデンティティ形成のメカニズムについての本格的調査研究はほとんどないという現状であった。

2. 研究の目的

本研究課題の目的は、チベットにおける文化復興の実態を広域的実地調査により明らかにすると同時に、ウ・ツァン地方のチベット自治区、カム地方の四川省甘孜藏族自治州、青海省玉树藏族自治州、アムド地方の青海省黄南藏族自治州、海東地区、四川省阿壩藏族自治州などの村々における集中的実地調査をもとに、僧院・祭りの復興、観光化、チベット人-漢人-回族という多民族間関係の分析に基づき、チベットにおける文化復興とアイデンティティ形成のメカニズムを文化人類学的視点から解明することにある。

3. 研究の方法

(1)本研究課題の目的にそって、以下の研究方法に基づきフィールド調査を実施した。フィールド調査は広域調査と集中調査からなり、調査研究方法是参与観察、聞き取り、光学カメラ、デジタルカメラ、デジタルVTR、MDレコーダー、GPS等の機器によるフィールドデータの収集と記録、文献情報資料の収集、データベース作成、情報データの解析からなる。

(2)なお、チベット族を対象とするインタビュー調査は、相手の同意と協力のもとに実施し、プライバシーおよび利益の保護に十分配慮した。

4. 研究成果

(1)チベット文化の復興については、チベット各地における広域的調査の結果、ウ・ツァン地方、カム地方、アムド地方において、伝統的チベット文化の復興が行われていることが明らかとなった。たとえば、ウ・ツァン

地方におけるラサのショトン祭と歌劇、カム地方における競馬祭と英雄叙事詩「ケーサル」、アムド地方における山神信仰とシャマニズムの伝統に基づく六月祭などである。これらは既存体制の中での伝統文化の復興であり、チベットの歴史的、文化的地方差を提示する結果となっていた。また、これらの文化行事は観光と結びつき、観光資源としての新たな役割を担おうとしていることが明らかにされた。

(2)宗教の再活性化と僧院の復興については、1978年以後の民族宗教政策の具体化とともに、信仰の自由と僧院の復興、伝統的行事、祭礼の再活性化が図られていることが明らかにされた。仏教僧院の復興の現状分析から、僧院では1980年代に本堂となる建物の再建が行われた後、2000年代には僧侶の教育のための学院、学校の整備が図られた。

さらに、ここで伝統的財政基盤を失った僧院は、「寺は寺で育つ(イースー・ヤンスー)」との宗教政策のもとに経済的自立を戦略的に進め、収入源としてのホテル、売店、病院、印刷所の経営、さらには観光などさまざまな事業展開を行ってきた。しかし、これらの戦略は僧院における学問と商業との間の葛藤の中で、宗派や僧院の立地条件の差異を背景に僧院間における格差を生み出す結果となっていた。さらに、学校、病院、診療所の経営など、社会福祉事業を展開する僧院もあり、僧院が村人の福祉の実現を支援する役割を果たしながら、存続を図っていることが明らかにされた。

(3)民族間関係と紛争解決については、アムド地方における集中的調査から、チベット族、漢族、回族混住地域において、地域の祭りが、宗教行事と商売を民族ごとに分離することにより民族間の葛藤や摩擦を避け、地域としての連帯性を形成する場となっていることが明らかにされた。

さらに、畑の水争いをめぐる民族間における紛争は、過去の経験を踏まえ、日々の生活における経済的利害関係によって結ばれる集落間や民族間の関係性の中で、争いよりも共生を選択する方が得策であるとの判断と「争いたくない」という感情により、拡大の阻止が図られていることが認められた。

(4)文化復興とアイデンティティの形成については次のような傾向が見られた。チベットのアイデンティティには、汎「チベット人」としてのアイデンティティとともに、「最もすぐれた宗教はウ・ツァンの地から、最もすぐれた男はカムの地から、最もすぐれた馬はアムドの地から」と伝統的に言われてきたように、歴史的、文化的地方差に基づく地方的チベット人としてのアイデンティティが見られる。既存体制と経済活動とに結びついた文化復興を通して、地方的チベット人として

のアイデンティティは強調され、同時に僧院の復興により仏教の理念を背景にした汎「チベット人」としてのアイデンティティが維持されている。

さらに、漢族や回族を含む多民族混住地域においては、民族的アイデンティティを横断する形で地域的アイデンティティが形成され、祭りや日々の経済活動を通して民族的共生関係が維持されている。ここでは民族や宗教が紛争の原因とはなっておらず、むしろ人々の合理的な判断が紛争を阻止する基盤となっている。アイデンティティ形成のメカニズムは生存戦略としてのアイデンティティの操作にあり、政治、経済、民族間関係の中での人々の選択によるものであるということができよう。

(5)以上の成果は、国際会議「現代社会の伝統文化における連続性、共生、心」(2008年11月1-2日、於北海道大学)において発表、討論され、Continuity, Symbiosis, and the Mind in Traditional Cultures of Modern Societies. Yamada, T. and T. Irimoto(eds.), Hokkaido University Press, 2010 (in press)として出版されることになっており、研究成果の国際発信となるものである。

また、本研究を通して、北海道大学大学院専門研究員の連携研究者は、平成20年度博士學位論文『チベット族による民族間紛争の解決に関する人類学的研究』を作成、提出し、学位取得を行い、京都大学大学院生の研究協力者も博士學位論文の執筆中である。さらに、平成21年度には調査研究地域出身のチベット人が留学生として北海道大学大学院に入学し、平成22年度からは修士課程大学院生として研究を継続するなど、当該研究の教育的効果は大きく、社会的還元も図られている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計18件)

- ①煎本孝、チベット研究の現状とデータベース作成、北方学会報、有、14、2010、43-49。
- ②山田孝子、「移動」が生み出す地域主義—今日のチベット社会にみるミクロ・リージョナリズムと汎チベット主義、地域研究、有、10(1)、2010、33-51。
- ③上原周子、集落間における畑の水争いとその解決 - 中国青海省海東地区における事例から -、北方学会報、有、14、2010、21-34。
- ④Uehara, Chikako. Anthropological Study on Ethnic Conflict Resolution by the Tibetan People: the Case of Hualong Hui Autonomous County, Haidong Prefecture, Qinghai Province, China. Northern Studies Association Bulletin、有、14、2010、7-9。

⑤Yamada, Takako. A Reappraisal of the Continuation of Shamanism in Modern Societies Based on Case Studies Among the Ladakhi and the Sakha. Mihály Hoppál and Zsuzsanna Simonkay (eds), Shamans Unbound, Budapest: Akadémiai Kiadó, 有、2008、69-80。

⑥山田孝子、「チベット、アムド、カム地方における宗教の再活性化とチベット仏教僧院の存続に向けての取り組み」、北方学会報、有、13、2008、4-12。

⑦上原周子、「青海省チベット族の生活と信仰—ジェンザ・マニカンと12の集落」、北方学会報、有、13、2008、24-35。

⑧ Irimoto, Takashi. Anthropological Themes Today Viewed from Northern Studies. Northern Studies Association Bulletin 12, 2007, 1-3。

[学会発表] (計8件)

① Irimoto, Takashi. Ecological Implications of Tibetan Buddhism: Exorcising Rites in Village and Monastic Festivals. The XXth Congress of IAHR. August 15-21, 2010, Toronto, Canada: University of Toronto.

②Yamada, Takako. Shamanic Power and the Continuity of Tibetan Buddhism in Ladakh. The XXth Congress of IAHR. August 15-21, 2010, Toronto, Canada: University of Toronto.

③ Yamada, Takako. Shamanism that transcends the borders: with special reference to Ladakhi shamanism. IAHR. Special Conference. April 19-22, 2007, Stockholm, Sweden: Södertörn University College.

④Yamada, Takako. Relationship between Humans and Nature: From Animism to a Philosophy of Ecology. Continuity, Symbiosis, and the Mind in Traditional Cultures of Modern Societies, Sapporo International Workshop. November 1-2, 2008, Faculty House Enreiso, Hokkaido University.

⑤ Uehara, Chikako. A Strategy for Coexistence: Case of the Festival at Temple W in Haidong District, Qinghai Province, China. Continuity, Symbiosis, and the Mind in Traditional Cultures of Modern Societies, Sapporo International Workshop. November 1-2, 2008, Faculty House Enreiso, Hokkaido University.

⑥ Yamada, Takako. A Reappraisal of Eurasian Shamanism. A Circumpolar Re-Appraisal: The Legacy of Gutorm Gjessing (1906-1979), A Crossdisciplinary

Symposium on the Arctic. October 10-12, 2008, Norwegian University of Technology and Science (NTNU), Trondheim, Norway.

⑦ 山田孝子、「チベット、アムド・カム地方における宗教の再活性化とチベット仏教僧院の存続に向けての苦闘」第13回生態人類学会研究大会、2008年3月22-23日。富山市、富山大学。

〔図書〕(計5件)

① Yamada, T. and T. Irimoto (eds.), Hokkaido University Press, *Continuity, Symbiosis and the Mind in Traditional Cultures of Modern Societies*, 2010. (in press)

② 山田孝子、京都大学学術出版会、『ラダック』、2009、421。

③ 上原周子、北海道大学、『チベット族による民族間紛争の解決に関する人類学的研究—中国青海省海東地区化隆回族自治州における事例から—』[博士学位論文]2009、203。

④ 煎本孝、山田孝子 (編) 京都大学学術出版会、『北の民の人類学—強国に生きる民族性と帰属性』2007、340。

⑤ 煎本孝、山岸俊男 (編) 世界思想社、『現代文化人類学の課題』2007、233。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

煎本 孝 (IRIMOTO TAKASHI)
北海道大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：50124227

(2) 研究分担者

山田 孝子 (YAMADA TAKAKO)
京都大学・大学院人間・環境学研究科・教授
研究者番号：20293839

(3) 連携研究者

上原 周子 (UEHARA CHIKAKO)
北海道大学・大学院文学研究科・専門研究員
研究者番号：50570008

(4) 研究協力者

小西 賢吾 (KONISHI KENGO)
京都大学・大学院人間・環境学研究科・大学院生 (博士課程)